第５回札幌市ウォーカブルビジョン
策定検討委員会

議　事　録

日時　令和８年（2026年）２月26日（木）13時00分開催
場所　オンライン開催

発言者	発言内容
石井 政策推進担当課長	定刻となりましたので、これより「第５回札幌市ウォーカブルビジョン策定検討委員会」を開催いたします。 本日の事務局を務めます、札幌市まちづくり政策局政策企画部政策推進担当課長の石井と申します。どうぞよろしくお願いいたします。 本委員会は、北海道外の委員が多数おりますことから、オンライン開催としております。また、本日は全委員出席となっており、委員の皆様におかれましては、御多忙の中、御参加いただきまして誠にありがとうございます。なお、泉山委員につきましては、御都合により途中30分ほど離席される予定であり、また、林委員におかれましても御都合により14時頃に退出されますことを御案内申し上げます。 事務局については、まちづくり政策局政策企画部政策推進担当部長の須志田、都心まちづくり推進室長の二宮、都市計画部長の小林、総合交通計画部長の松本の計４名の部長職が参加しておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。なお、須志田につきましては、公務の都合により別会場から接続しておりますことを御承知おきください。 また、本委員会はウェブ上で一般の皆様にも公開しており、会議終了後には個人に関する情報を除きまして、出席者氏名、発言者等を記載した議事録を公開予定ですので、あらかじめ御了承ください。 オンラインで視聴されている皆様におかれましては、本委員会中の御質問や御意見を受け付けることが難しいため、終了後に事務局である札幌市政策推進担当課まで御連絡をいただけますと幸いです。 それでは事務局を代表しまして、札幌市まちづくり政策局政策推進担当部長の須志田より、御挨拶申し上げます。
須志田 政策推進担当部長	札幌市まちづくり政策局政策推進担当部長の須志田でございます。本日はお忙しいところ「第５回札幌市ウォーカブルビジョン策定検討委員会」に御参加いただき、誠にありがとうございます。 あらためて本委員会の趣旨についてですが、札幌市では、居心地が良く歩きたくなるまち「ウォーカブルシティ」を推進するため、官民一体となって取り組む際の指針となる「Well-Moving City SAPPORO 2045 ビジョン」を今年度末に策定する予定です。

	このビジョンの策定に向け、昨年７月に開催した第４回検討委員会では、ビジョンの素案について説明させていただき、委員の皆様からの貴重な御意見をいただいたところです。 本日の第５回検討委員会で最終回となりますが、これまで委員の皆様から頂戴した御意見等を踏まえて修正したビジョン最終案や今回新たに作成した周知用パンフレット等について御確認・御議論いただくことを予定しております。またビジョンの実現に向けてのポイントとして、推進プログラム及び「（仮称）パブリックスペース活用ガイドライン」を整理いたしました。 限られた時間の中ではございますが、ぜひ皆様の専門的な見地からの忌憚の無い御意見を頂戴できれば幸いでございます。 本日はどうぞ、よろしくお願いいたします。
石井 政策推進担当課長	それでは本日の議事について、有村委員長にお願いしたいと思います。有村委員長、よろしくお願いいたします。
有村委員長	皆様、本日第５回目で最終回のウォーカブルビジョン策定検討委員会となります。皆様どうぞよろしくお願いいたします。それでは早速議題に入らせていただきます。まず事務局から、事前に配布されております資料の説明をお願いいたします。
石井 政策推進担当課長	事務局より、まずは前半部分としてビジョン最終案について、これまでの取組を振り返りながら説明いたします。 また、本スライド内では資料２にあたる概要版、本書については画面表示いたしませんので、適宜お手元で御確認いただければと思います。 まずは本委員会も含めまして、これまでの検討経過を画面に表示しております。 市内10地区を超える実証実験や、市民ワークショップ・フィールドワークなど300名を超える主体的な市民参加、大学連携や企業連携、また世界の冬の都市との連携など多様な産学官連携により、ビジョン最終案が完成いたしました。 委員の皆様におかれましては、昨年度６月に開催したシンポジウムへの御参加から始まり、これまで計４回の検討委員会への御協力をいただき誠にありがとうございました。 こちらは前回、昨年７月に開催しました第４回検討委員会の実施結果の概要です。 ビジョンの素案に対して多角的な御意見をいただき、例えば一行目、５つの重点方針の表現方法についての御意見をいただきました。

	こちらにつきましては、この後説明いたしますが、周知用パンフレットの中で表現方法を見直しております。 また、一番下の行では、「歩くことで歴史や文化に触れることを大切にするべき」との御意見をいただきました。 こちらは本書の37ページに、まち歩き研究家ブラサトルさんにコラムを執筆していただき追加掲載するとともに、今後より連携を深めていくことを確認しております。 次に上から２行目、モデルケースの記載方法について、他地区において参考になるポイントを明確化するべき、と御意見をいただきました。 こちらにつきましては本書52ページの北３条広場のページを中心として、各関係者と調整の上、ポイントとなる事柄を明記するなど記載内容を見直しました。 次に下から３行目、本ビジョンにおける象徴的な表現である「あるかさる」をキャラクター化するなどして、まちづくりの未来を担う子どもたちへの訴求力を高めるべき、との御意見をいただきました。 こちらにつきましては、この後説明いたします周知用パンフレットの中で制作中ですので、今後多角的に活用してまいりたいと考えております。 次に昨年７月に開催し、委員の皆様にも御参加いただきましたシンポジウムにつきまして実施結果を報告いたします。 当日は、画面中央の円グラフにあるとおり、エリマネ団体の方が27%、民間企業の方が31%など産学官民の多様な人材が135名も集まる機会となり、ビジョン素案への御意見をいただくとともに、市内各地のまちづくり団体によるトークセッションも実施いたしました。 また、当日実施したアンケート結果では、９割の方から本ビジョンを推進すべきとの回答をいただき、非常に力強く感じたところです。 こちらは当日御参加いただいた市内各地のまちづくり団体の一覧です。 令和６年度の公募型実証実験に応募いただいた「平岸」「宮の沢」「真駒内」の皆様。また、冬の実証実験を官民連携で実施した「新さっぽろエリアマネジメント」の皆様にも御参加いただきました。 市内には他にも多くのまちづくり団体がございますが、当日これだけ多くの団体の皆様に御参加いただき、相互に知見を共有す

	る場は初めてのことだったのではないかと考えております。 　次にシンポジウム参加者からの声の抜粋です。 　左側のグラフは、ビジョン策定後に設立を予定している共創ネットワークに対してどう関わりたいかについての回答を表しております。 　５割以上の方が「ワーキンググループに参加したい」「積極的に情報収集したい」と回答しており、私どもの想定を越える関心の高さを確認することができました。 　また、右側に自由記載欄にいただいた声を抜粋して掲載しておりますが、産学官民さまざまな方々から、具体的な声をいただいており、こうしたことからもビジョンに対する関心の高さを実感したところです。 　これまでビジョン策定に向けて繋いできた縁を絶やさずに、次年度以降も取組を進めてまいります。 　次に、今年の１月から２月にかけて実施しておりましたパブリックコメントの結果について報告いたします。 　約１か月間実施し、計32件、15名の方から御意見をいただきました。 　一行目の御意見は、本ビジョンの考え方に共感しつつも、都心部だけでなく、郊外や生活圏にも取組を広げることで、市全体の暮らしやすさの向上を望む意見でした。 　こちらにつきましては、本ビジョンの特徴でもある都心部以外の「地域交流拠点」や「住宅市街地」においても、それぞれの特性にあった「歩かさるまち」をつくってまいりたいと考えております。 　次に、一番下の行では、実際にパブリックスペース活用を実践していただいた方からの御意見で、より取り組みやすくなる事例の共有や支援制度を望む声がありました。 　こちらにつきましては、本日も説明します「パブリックスペース活用ガイドライン」を作成し、公共空間の活用事例や活用方法、手順などをわかりやすく周知してまいります。 　次に、一行目の御意見は、「収益の一部をエリアマネジメントに還元する仕組みを構築するなど、ウォーカブルな空間作りを経済合理性に基づいた官民連携の投資と位置づけるべき」との御意見がありました。 　本市の一部エリアでは、すでに、オープンスペースの貸出収益を維持管理費や地域まちづくりに充当する仕組みを構築しておりますが、今後もこうした取組を推進してまいります。

	最後に一番下の行では、「本ビジョンの目指す姿や具体的な取組が、市民一人ひとりに浸透するような効果的な広報が必要」との声をいただきました。 こちらにつきましては、現在作成中であります「パンフレット」や「ロゴマーク」、「ポスター」などを活用して、効果的な広報に取り組んでまいります。 次に、来月末の完成に向けて現在制作中のパンフレット案について説明いたします。 パンフレットの想定使用シーンとしましては、単にパンフレットラックに配架しておくのではなく、シンポジウムやまちづくりイベント等で直接手渡しをし、参画を呼びかける際に使用したいと考えております。 また、参画者を増やす工夫といたしまして、前回の委員会で御意見をいただいたキャラクターの制作を進めており、画面右側におりますのが「雪山にいると言われる幻の雪男イエティ」と猿を組み合わせたオリジナルキャラクターです。 また、現在ロゴマークも制作しており、左上の歩く足をイメージ化した案や、その右下の春夏秋冬を４色で表現し、自転車の軌跡や足跡を組み合わせて漢字の「歩く」をビジュアル化した案などを検討中でございます。 こちらが実際のパンフレットの作成中イメージです。 手に取りやすい正方形とし、全12ページのコンセプトブックをイメージして制作中です。 まずはビジョン本書でも掲載しております、札幌の四季と、「心も一緒に動くまち」を表すコピーを紹介しております。 つぎに、今回札幌市が20年後の未来を見据えて定めた「Well-Moving City」という新たな都市空間コンセプトを説明するページです。 これまでの「ウォーカブル」だけでは「歩くことができない人」や「自転車」「公共交通」がどうしてもイメージから外れてしまうということもあり、身体的・精神的・社会的に健康な状態を表すWell-Beingに「移動する」「心が動く」という意味を込めたMovingを組み合わせることで、「Well-Moving City」、つまり、誰もが自然と「あるかさる」「心も一緒に動くまち」を目指していくことを説明しております。 こちらは「Well-Moving City」を構成する５つの重点方針についての説明です。 前回の委員会で御意見いただきました、５つの重点方針それぞ

	れの補足説明を入れながら、先ほど説明したキャラクターが、Well-Movingなまちを楽しんでいる様子が描ければと考えております。 　つぎに、Well-Movingな都心、地域交流拠点、住宅市街地の目指す姿をパースで表現するページです。 　鳥瞰パースがメインなこともあり、アイレベルの人の活動が読み取りづらくなっておりますので、表現方法は今後工夫してまいりたいと考えております。 　次に、読み手の立場に応じて行動変容を促す仕掛けとして、様々な参画方法を明示するページを用意しております。 　例えば、学生の方であれば右上にチェックいただき、学生団体やゼミ単位でのまちづくり参画や、地域のエリアマネジメント団体への参加などを掲載しております。 　最後に左側の裏表紙にて、参画意欲が高まった方とスムーズに連携できるよう、パブリックスペース活用ガイドラインへのリンクや、Well-Moving Networkへの参画への導線を用意しております。 　委員の皆様も様々な地域での知見をお持ちだと思いますので、構成も含めて、ぜひ御意見をいただけますと幸いです。 　事務局より前半部分の説明は以上です。有村委員長へお返しいたします。
有村委員長	ありがとうございました。 　ただ今事前の配付資料前半につきまして、事務局 　より御説明いただきました。委員の皆様、ここから意見交換に入りたいと思いますが、何かコメント、御意見等ございますでしょうか。 　久しぶりのオンライン会議ですが、直接手を挙げていただくか、もしくは直接お話いただいても構いません。 　すぐ出ないようですので、私の方から一つだけ質問いたします。 　シンポジウムを実施した際の参加者の属性ではエリマネ団体27%であり、ビジョンの推進に賛同した割合も極めて高いんですけども、２%の方が否定という結果が出てきていて、否定される方って必ず意見があると思います。何か自由意見等々でコメントはありましたか。
石井 政策推進担当課長	２%の方につきましては、自由記載欄の中に「費用対効果」とだけ書かれていたというところで、ビジョンのどの部分にそう感じたのかその具体の意図までは分からない状況です。

有村委員長	参加者の属性は分かりますか。
石井 政策推進担当課長	属性までは把握しておりません。
有村委員長	分かりました。ありがとうございます。 ほか御意見、御質問等はございますか。
道尾委員	道尾です。御説明いただきありがとうございました。様々なビジョンやシンポジウム、そして具体的な広報の内容からも、多様なアイデアが提示され、非常に楽しい印象を受け、心が動かされ、働きかけのあるビジュアルやコンテンツに仕上がってきていると思いました。今後、ロゴやキャラクターなども含めて、さらに詳細化していくことを期待しております。 その感想の延長ですが、一点目。現在、左側に示されている内の下側のロゴでモックアップを作成されていますが、これが四季のイメージ、そして先ほどの移動手段の足跡や軌跡、さらには心が動く、色、多様なコンテンツで弾むといった言葉のフレーズで表現されているイメージを、ビジュアルでより表現するような、デザイン的な質の向上にも期待したいと思います。 二点目は、18ページの内容についてです。先ほど、アイレベルの視点を取り入れた工夫をしていくとのことでしたが、都心部や住宅市街地などのロケーションでこの舗装路のグレーのトーンが、まず目に入ってくるということがございます。 この道の舗装路の描かれ方、一部レンガのような土系の着色もございますが、アスファルト舗装のような箇所が今後どのように描かれていくのかという点について、気になり発言させていただきました。 以上でございます。
石井 政策推進担当課長	まず一点目のロゴ等につきまして、これまでの検討委員会での御意見やビジョンの考え方を踏まえ、歩くだけではないというところも重要視しているところですが、左上のロゴは歩いている様子ですし、右下のロゴについても歩という漢字を基にデザインされているということで、市内部でも議論になっております。 現在調整中のところもございますので、いただいた御意見を踏まえて引き続き検討していきたいと考えております。 また2点目の舗装路の部分につきましては、パンフレットに掲載するという点に鑑みて工夫の余地が無いかこちらも併せて検討してまいりたいと思います。以上です。
有村委員長	ありがとうございました。

	ちょうど今出てますが、住宅市街地のレンガ調に見えるところは、本当にそういったもので作るのかというところはあるかと思いますので、実際に施工した場合のイメージに近づけた方がいいのかなという印象は、私自身が土木関係の人間なので、少し気になっておりました。 ほかに御質問、御意見等ございませんでしょうか。
山崎委員	山崎です。御説明ありがとうございました。 何点かありますが、ただ今意見のあったところで言うと、アイレベルの活動が読み取りづらいという御説明があった部分は、私も同じように思っております。 また、話を聞いていて改めて思ったのは、四季を通じて～というところを重点方針の中に掲げていて、かつやはり札幌の場合だと冬季のことが話題になりやすいという観点で考えた時に、このパースを更新する際に冬季に関するビジュアルの割合を現在のまま進める予定か又は変更の予定があるか、まずその点をお伺いしたいと思います。
阿部 推進担当係員	事務局の阿部です。御意見ありがとうございます。 山崎委員の御指摘の通り、札幌市のビジョンになりますので、札幌の強みでもある冬というところをもう少し押し出していった方がいいのではないかという話は、市内部でも議論していたところです。 現在、パンフレット内に多数ある絵の中で、冬の絵の割合は今一枚しかないので、それをもう少し増やすかという点について、全体のバランスを見ながら検討していきたいと思います。
山崎委員	ありがとうございます。 実家が札幌にある身としては、やはり冬季に外出することが楽しいイメージと繋がるといいのですが、今年などは特に雪が多かったこともあるように、高齢者の方を中心に外出する意欲が失われてしまっている中で、どのように外で時間を過ごしてもらうかという点をビジョンとして少しでも訴求できると良いのかなと思いました。 冬になると雪かきのために外に出て行って、近所の人も外に出る機会になるのでそこで久しぶりに人と会い、「元気にしてた？」という会話になるシーンは自分も実感としてあります。 今のは一案でしたが、そういう身近なアイレベルのシーンを増やすなど、具体的にどんなシーンに共感してもらいたいのかという点も含めて考えられるのではないかと思います。

	次に、産学官民で分けられている部分について、実際に何か活動したいとか、自分たちでこの場所を使えないだろうかと思ったときに、自分のカテゴリーが何なのかというところから考える作りになっていると思います。 プレイヤー目線ではむしろ動機、場所、活動内容など、具体の内容が入り口になることがあると思うので、パンフレットとしてまとめる上では、産学官民ではないまとめ方、もちろんこれも手法の一つですが、この場所を使いたい人はどうしたらいいかとか、やりたいことベースで整理するという方法もあると思ったので、検討されてはいかがでしょうか。以上です。
石井 政策推進担当課長	産官学民の４つのカテゴリーではなく、動機や活動したい場所から整理する方法もあるということで、確かにそのような手法もあると思います。 一方、現状ではビジョンのコンセプトブックを想定しているというところで、最後に活動にどう繋げていくかという点についてはパブリックスペース活用ガイドラインを用意しております。 ガイドラインについては後ほど説明させていただきますが、パンフレットについてはコンセプト的にまとめつつ、具体的な活動や場所についてはガイドラインの方へ適切に誘導できるよう内容を検討してまいります。
大藪委員	大藪です。御説明ありがとうございます。 元々、札幌市の最上位計画にウェルネスプロジェクトが設定され、その重点施策の一つとしてウォーカブルシティの推進があり、それをWell-Movingと称して五つの重点方針がぶら下がっている形となっています。 私は今のまとめ方でいいと思っていますが、健康から始まりそのための施策の下にまた健康が入っている構造のため、現在のパンフレット案にその部分の解説がない状態でどのように市民へビジョンを説明していくのか。入れ子状態になってるような気もするため、市として何かお考えがあるのかお聞きしたいです。
阿部 推進担当係員	ウェルネスプロジェクトの重要な柱としてウォーカブルが動き始めたという背景はおっしゃる通りですが、その後のウォーカブル施策の検討にあたり、ウェルネスという文脈の中で全てを語っていくのは難しいという議論を市内部や委員の皆様ともさせていただいたところです。 こうした議論を踏まえ、現在、改定作業を行っている都市計画マスタープランの大きな枠組みとも連動し、最終的には広く都市

	空間を捉えながら、 20年後を見据えたビジョンとして運用していくことを考えております。 　階層としては少し複雑に見えてしまいますが、市民に対しての説明としては、ビジョンが目指す都市空間を形成する重要な方針の一つに健康があるという話になると考えております。 　また市内部では継続して関係部署との調整を図っており、共に連携していくことを前提にこうした形で整理しているところでございます。
大藪委員	承知しました。ありがとうございます。御説明いただいた通りでよろしいと思います。 　その中で、やはり効果指標や政策の進捗管理について今後の取組方針で議論されると思いますが、ウェルネスから始まっているというのは個人的にはとてもいいなと考えております。 　過度に商業的な賑わい効果を押し出すよりも、そういった暮らしやすさという観点からウェルネスという言葉で作っていくのはとても大事だと思います。 　もちろん五つの重点方針の一つという位置付けではありますが、スタンスとしてとても大事な観点ですので質問させていただきました。以上です。
三谷委員	御説明ありがとうございました。全体的にすごくいいビジョンになりつつあり、素晴らしいと思います。 　19ページのパンフレットのことで気になった点ですが、この推進体制の概略に書かれている、「みんなで一緒に作ろう Well-Moving City SAPPORO」という呼びかけの中で、学のところに大学・高校と書かれています。 　継続的なプロジェクトとしていく場合においては実際そのとおりではある一方で、小学校の総合学習や探究学習の中でパブリックスペースを使って授業を行ったり、街歩きの中で子どもたちに四季を通じた札幌の外を歩くことの心地良さを体験をしてもらったりすることも、すごく大事なことと思います。 　対象をどこまで書き込むかという判断もあるとは思いますが、子どもたちも幅広く関われるような、関わり代をどこかに作っていただけるといいと思いました。以上です。
石井 政策推進担当課長	私たちもプロジェクト活動というイメージで考えておりましたので、このような書きぶりになっておりましたが、教育や学習の観点も大変重要だなと思いましたので、御意見を踏まえ改めて検討したいと思います。ありがとうございます。

有村委員長	おおよそ一通り出ましたでしょうか。先ほどチャットで泉山委員からアイレベルに関するコメントがありました。 皆さん、Zoom横のチャットを御覧いただきたいのですが、概要版の第４章推進体制支援策に関し、対象が歩道などの道路や公共部分のみになっているので、民間建築の低層階、アイレベル関係のウォーカブル関係の制度、補助を含めて、Howのあたりを追加した方がいいという御意見をいただいております。 こちらの御意見につきまして、事務局の方で何かしら御対応の可能性はございますでしょうか。
阿部 推進担当係員	本書ではアイレベルに関する記載箇所がありますが、そちらも楽しむという観点のみ言及している状況となっております。 御意見を踏まえ、民間建築の低層階との関係等についても記載を見直し、追加できるところがあれば対応してまいりたいと思います。
有村委員長	ほか御意見ございませんでしょうか。 後半の説明後、全体を通しての質疑の時間もあると思いますので、このまま議事を進めていきたいと思います。それでは、事務局から引き続き説明をお願いいたします。
石井 政策推進担当課長	ここからはビジョン策定後の今後の取組案について、説明いたします。 まずは今後の想定スケジュールです。 画面上段には春からの令和８年度、下段に令和９年度、１０年度以降を表しております。本ビジョンは理念的で網羅的な内容としておりますので、今後は実現に向けた具体施策をまとめた推進プログラムを作成いたします。 また、今年度までの産学官民のつながりを活かし、「つながり、ためし、育てる場」としての庁外ネットワークの組成を検討しております。 さらに委員の皆様や、パブリックコメントで御意見いただいておりました、広報やPRについても、しっかりと取り組んでまいります。 こちらは現時点の推進プログラムのイメージです。 推進プログラム自体は令和８年度中の策定を予定しておりますが、迅速性と実行性を重視し、策定前の早期に関連施策の整理・実行を進めたいと考えております。 また令和９年度には札幌市全体の中期実施計画の策定もございますので、柔軟に更新・改定ができる仕様とする予定です。内容

	につきましてはまず、第１章で庁内各課へ事業構築に向けた観点整理となる指針を示してまいります。 　第２章では、これまで委員の皆様から御意見をいただいておりました指標について、ビジョン全体の進捗を図る指標と、５つの重点方針に関する指標や主要事業を整理します。 　さらに第３章では庁内横断的に取り組む必要のある「エリアマネジメント」や「人材育成」「データ利活用」などについて整理したいと考えております。 　第４章では、５つの重点方針に紐づく具体事業を事業集として整理し、毎年更新しながら進捗を確認してまいります。 　最後に第５章では評価・改善システムとして、ビジョンの進捗をどのような場で何を基準に評価し、どう推進していくのかというフローを明確化し、さらに短期ロードマップとしてリーディングプロジェクトなどを明確に推進する方向性を示したいと考えております。 　次に、今後の推進体制のイメージです。 　本ビジョン検討のために構築した、副市長を本部長とした局横断的な会議体である推進本部会議を、推進主体として再構築し、進捗管理を徹底してまいります。 　また、都心・地域交流拠点・住宅市街地の３つのエリアPTは解消し、新たに２つのテーマPTを新設します。 　パブリックスペース活用PTでは、このあと説明するガイドラインを形骸化させることなく、管理者も含めた推進体制とすることを検討しております。 　またエリアマネジメントPTでは、近年市内各地で活発化してきているエリアマネジメントについて、庁内各課で連携して検討・推進していくことを想定しております。 　これら２つのPTと関連の深い庁外との対話の場として「（仮称）Well-Moving Network」を組成したいと考えております。 　このネットワークでは市内各地のエリアマネジメント団体や商店街などの団体を正会員とし、パートナー企業、パートナー大学にも参画いただく対話の場としたいと考えております。 　もちろんWell-Moving Cityの実現に向けてはこの２つのPTとネットワークだけで全てカバーできないため、左側にも表示しております、５つの重点方針に関わる庁内各課と連携を図り、推進本部会議にて進捗管理を行います。 　最後に、現在作成中のパブリックスペース活用ガイドラインについての説明です。

	市内の公共的空間の活用事例や手続き、支援制度等をまとめたガイドラインとし、令和８年春頃に公開予定です。 作成の背景としましては、昨年度の実証実験実施団体より「そもそも活用できることが知られていない」「手続きがまとまった冊子がほしい」との声を受けたことに始まり、支援策の一つとするものです。 他都市においても先行事例はあり、理想は高く持ちたいところですが、まずは現時点の制度等をまとめたガイドラインを早期に作成し、今後ネットワークなどの場で現場の声を拾い、より活用しやすい内容に更新していければと考えております。 ここからは、ガイドラインの構成と章ごとの内容について簡単に説明いたします。 第１章では、パブリックスペースを活用することの目的などについて掲載し、ガイドラインの必要性を語ります。 第２章では、このガイドラインの使い方を掲載し、パブリックスペースの活用を検討する上で、ガイドラインのどこのページを確認すればよいかのフローなどを示します。 第３章は、このガイドラインのメインになりますが、各パブリックスペース毎の活用に必要な手続きを記載します。個別の手続きを紹介する前に、まずは活用する際の全体的なルールについて掲載します。 全体のルールについて触れた後は、個別の手続きについて掲載します。各パブリックスペースの手続きページは、同じような構成を予定しております。定義、写真による活用事例の紹介、手続きの流れ、活用基準、活用する上での注意事項等について掲載します。 第４章では、活用する内容によって必要な所定の手続きについて掲載します。例えば、飲食を行う場合は、営業許可の手続きが必要な旨とその手続き方法について掲載します。 第５章では、活用を支援する制度や活用実践者の声を踏まえた事例紹介を掲載します。 以上、簡単ではありますが、ガイドラインの構成とその内容について説明させていただきました。 事務局説明の後半分、今後の取組案についての説明は以上です。有村委員長にお返しいたします。
有村委員長	ありがとうございます。 ただいま推進プログラム、推進体制、パブリックスペース活用ガイドライン等につきまして御説明いただきましたが、後半につ

	きまして皆様、御意見等ございますでしょうか。
林委員	御説明ありがとうございます。 感想がほとんどとなりますが、全般としてすごく分かりやすく、これからWell-Movingが街中に浸透していくための担い手の育成やソフト的な支援体制も整ってきており、とても良いと思います。 少し細かいですが、エリアマネジメント推進PTとパブリックスペース活用PTで、左下の②に各管理者を含めた推進体制を構築と書いてある部分について。これは私の希望ですが、ここには管理者には、管理職の方と担当の方の両方がいていただけるととても嬉しいです。 本部の方に管理職の方がいて、現場の方にご担当の方がいるではなく、同じ場に両方の立場の方が一緒にいると、同じ空気を感じながらその後かなりスピード感を持って取組み進めることができるのではと、普段やり取りをさせていただいている上で感じております。 それから、ガイドラインについてです。現在、作成中とのことで「どこで何をやるか」というページがあったかと思いますが、これが一番危ういところで、この議論から入ると 公と民の対話が非常に難しくなります。 「何のために」や「誰のために」といった目的を明確にし、そこを一番最初に置いた上で考える必要があり、「どこで何をやるか」はあくまで手法の話だと思いますので、まずは目的の部分に関する対話を公民で必ず行うというところを入れた方がいいと考えております。その上でガイドラインやパブリックスペースを活用していくと良いのではと思いました。 推進していく側である担い手のイメージでいろいろお話しさせてもらっておりますが、前半に御説明のあったシンポジウムは本当に素晴らしく、130人以上のエリマネ関係者等が一堂に会することが今まではありませんでした。 同窓会みたいな雰囲気もあり、あっちで何をやっているという発表があるなど、とてもいい空気感が出ておりましたので、全国的に同様のイベントあってもいいなと思うぐらい良かったです。 そういった場がありつつ、先ほど申し上げたガイドラインのような仕組みもあるという、この両輪があると本当にいいものになると考えておりますので、シンポジウムのような場を継続するといいと思いました。おそらくノウハウや経験もそこで共有されたり、貸したり借りたりなども起きるのかなと思います。

	私は今、政府や省庁系のワークショップ、シンポジウムなど全国各地で札幌の良さをみんなで話す機会が多いのですが、冬に雪があるということが素晴らしいという意見があります。 我々からすると今の時期はもう一通り雪が溶け始めて、景観が汚れてしまう時期ではありますが、外から見ると特に気にならず、ガタガタの溶けきっていない雪の道なども、子どもたちにとってはアトラクション感覚で楽しいようです。 我々がネガティブに捉えることも外から見るとすごくよく感じられることもあると思うので、市外の人とも会話しながら札幌市の良さを確かめていく場なども設計していくとすごくいいのではと思いました。 最後になりますが、やはり雪かきって素晴らしいものなんですよね。ウォーカブルじゃないですが、雪道でスタックした車をお隣や近所の方と一緒によいしょと押してですね、盛り上がって、拍手喝采がその場で生まれる。その場その場でエンターテインメントや祝祭空間が発生するというのは他の街には絶対にないです。スタックした車をみんなで救出する物語や劇場というのは本当に素晴らしい景色で、これを含めて景観ではないかと思います。 その辺りも忘れずに、人間らしい北海道や札幌にしかない温かさも入れていくと、Well-Movingで心の健康にもつながっていくのではと思いました。
有村委員長	ありがとうございました。事務局説明のスライドのページで言うと24～26ページでしょうか。現場に担当の方、その上役の方もいてくださいというところを少し反映させるような形にしていただければと思います。 他御意見ございませんでしょうか
道尾委員	道尾です。今の林委員からの発言にとても共感しながら、続きの要望があったので申し上げます。 24ページですが、エリマネ団体が札幌市内でも増えてきており、学生の若い活躍もあって良いエネルギーが札幌全体に発生してきております。 先ほど15分圏の話がチャットの方でも流れておりましたが、札幌市の区の地域振興課などは、行政の窓口として地域の実情を御存知の方々であると思います。そのため、地区の活動のエンジンになるようなエリマネ団体が札幌市の中で生まれているのであれば、ワンストップなどの手法だけではなく、実質的な相談相手である区やまちづくりセンターなどの役割を形骸化させずに、地域

	の賑わい、歩きやすい環境、健やかな市民生活へ、密度高く伴走していただければと思います。 　パブリックスペースの活用等も決して各地域の住民一人一人から切り離されたものではなく、先ほど林委員がおっしゃったような一つ一つの生活のシーンの一コマです。 　例えば一人がホコ天をやりたいと提案したときに、実はそう思ってたっていう近所の方がいて、そこで生まれた地域の希望を市の窓口にこぼすときちんと拾ってもらえる。 　そんなヒューマンスケールの取組みもあると思いますので、そこの価値に期待したいと思います。
石井 政策推進担当課長	このビジョンに関係する方をどんどん増やしていくというのは本当に大切だなと思っております。 　先ほど市民向けの広報PRについて説明させていただいたところですが、委員のお話にあった区、特に地域振興課などへ周知しつつ、最終的には巻き込んでいくような取組みを今後行ってまいりたいと考えております。
大藪委員	大藪です。林委員や道尾委員の御意見とも繋がりますが、やはりWell-Moving Networkがとても素晴らしく、きちんとやることがとても大事だと思います。 　林委員もおっしゃってましたが、年1回定期的な場の開催をぜひ実施していただきたいと思っております。 　まちなか広場研究会の年１回の会合や全国まちづくり会議的なものをイメージされるといいのかなと思っていて、年1回皆さんで集まって知見を共有していく。しかもそれが札幌の中心部だけではなくて、ある年は郊外のところで開催をしながら、エクスカーションでまち歩きをみんなでやってみるなどの取組みがあるとすごくいいなと思って聞いておりました。 　また、やはりネットワークのようなプラットフォームは要るのではないかと考えておりますし、気軽に意見を表明できる場としてもそういったものがあるといいなと思いますので、ぜひ札幌市さんには予算化をしていただいて、継続して運営していただければと思います。
石井 政策推進担当課長	ただ今お話にありましたシンポジウムについて、昨年、一昨年と開催しておりまして、来年度以降も続けていきたいと考えております。やはりあの場の雰囲気や繋がりを作る場というのは、かなり貴重だという話を聞き及んでおりますので、可能な限り継続していきたいと考えております。

有村委員長	チャットの方でもいろいろな御意見が出ております。 泉山委員からは、札幌は15分都市や20分ネイバーフッドを導入しやすい都市構造になってるんじゃないかというコメントが出ておりまして、私も昨年の７月に査読が通ったもので札幌都市圏15分都市導入可能性に関する論文を作成しました。 結構、導入のポテンシャルがある地域もありますので、ビジョンの推進プログラムやネットワークについて人的ネットワークをしっかり繋げ、ワークショップ等を入れていく必要があるのではと考えながらの泉山先生のコメントを見ておりました。 それから三谷委員からは御自身が作成に関与されたガイドラインについて情報提供いただいており、山崎委員からは、目的の共有の仕方についてコメントが出ております。三谷委員、山崎委員、何か御意見ございますか。
山崎委員	実は目的の共有をしっかりしなくてもいいという話もあるのではないかと思いました。 そこまで大げさに考えなくてもいい話なのかもしれないですが、公共的空間のガバナンスをしっかりすればするほど、勝手なことしてはいけないという委縮した認識を持ってしまう恐れや、サービスを受け取るだけなのかといった話にもなりかねず、表裏一体の部分があると考えております。 林委員とはやりたいことや心地良い空間で過ごしたいという発想と想像力をもっと柔軟に持ってほしいという考えは共有できていると思っておりますが、それを発言してもらい、公共的空間で発揮してもらう際の導線として、公民の目的の共有みたいなことから入るべきなのか。一定程度、ここで何かをしてみたいという話も許容できるような受け皿の在り方についても議論してもいいのではと思いました。
林委員	ありがとうございます。 これは個人的な意見にもなってしまいますが、パブリックスペースで誰かが何かをやるというのは、基本的に自由でいいと思います。そう思う一方で、自分の敷地ではなくなぜパブリックスペースで行うのか、その意義について私は、公と民の対話のためだと考えております。 パブリックスペースの活用は公と民が対話をする切り口として非常に最適で、こんな風に心地良い過ごし方をしたいという市民や地域のニーズを行政が知ることができる大事な機会だと思っております。 その上で、労力は掛かりますが、それを止めたり管理するため

	の場ではなく、要望を知り共に考えるための対話の場を設定することに意味があると考えておりますので、厳格なルールを敷いてあれこれ制限する趣旨ではないということが発言の意図です。
山崎委員	よくわかりました。 オヒサシビリティを高めるという観点で言うと、単純に外出率を高め、すれ違う頻度などもあるのではと思いました。 私は公共的空間で自分の想像もつかない、理解の及ばないようなことをしている人を見るのが好きなので、そういった偶発性を高める上で、不確実なことが起きやすい制度、仕組みやルール設計もあるのではと考えております。 大きなフィロソフィーが共有されつつ個別のフィロソフィーも存在するという形でしょうか。それを公共的空間で知ることができるといいですね。
有村委員長	ありがとうございます。委員の皆様の間では合意に至っているように感じますが、これをどのようにビジョンに落とし込むかというところかと思います。 私自身もポロクルの理事長をここ何年か務めておりますが、実装前には札幌駅前通を歩行者空間にし、そこでワークショップを行ったり、運動会をやってみたり、専門学校の服飾系の方々がそこでファッションショーを開催したり、個々の個性を発現して見てもらう場といいますか、見る見られるの関係性をゆるく作っていくような場所として、パブリックスペースを構成していきました。 そういった取り組みの一環でモビリティをどうするかという話を取り入れていきましたので、目的をしっかり決めすぎてしまうと参加しづらくなる部分はあると思います。 ただ、公共的空間は全員のものであり、多様な価値観が存在する時代でもあるため、そこをうまく発揮できるようなスペースとして活用するような取り組みを考え、どのように支援していくかというところにかかっていると思います。 この部分の緩い目的や価値観について、できるだけビジョンや推進プログラムに反映していただきたいなと思いました。 それでは、他に御質問はございませんか。
三谷委員	質問ですが、24ページの推進体制におけるエリアマネジメント推進PTとパブリックスペース活用PTについて、議論の内容や地域のフェーズによって考え方が変わる部分のあるとは思いますが、具体的な役割の違いを教えていただきたいと思います。

阿部 推進担当係員	ありがとうございます。ある程度似通った部分があるという点については、こちらも認識しております。 まず、エリアマネジメント推進PTにおいては、市内各地で様々な取組みを行われている団体が増えている現状があり、その際に札幌市役所の中でも対応する部署が細かく分かれていたり、それぞれの地区で個別の課題を抱えていることからアプローチが変わってきたりするなど、札幌市役所全体としてエリアマネジメントをどのように捉え推進していくのかという点で、少し難しいフェーズに入ってきております。 改めて市役所内でしっかりと検討し各団体の皆様と連携をしていくため、プロジェクトチームを組成していく方針で考えております。 また、パブリックスペース活用PTにおいては、エリアマネジメント団体の活動における一つの手段として、パブリックスペースの活用が考えられます。その際に、それぞれ課題を切り出して検討する必要性が増してくるだろうという議論が市役所内でも盛んになってきており、実際の活用手法に置き換えながらパブリックスペースの管理者も含めた枠組みを構成したいと考慮したところです。 両者をあえて切り分け特化して検討することで、どちらも前に進めていくことができるのではないかという議論をしていたところですが、まだ詰め切れてない部分も多くございますので、役割分担なども考えながら構築をしていければと考えております。
三谷委員	ありがとうございました。 エリアマネジメント団体と議論するエリアマネジメント推進のPTの方では、互いに知恵を出し合いながら解を見出していくといったところでしょうか。 パブリックスペース活用の方では、道路、公園等の共通する公共空間の規制を緩和するなどの検討にあたり、まず行政の方でしなければいけないことを整理するというイメージを持てました。
大藪委員	令和８年度に推進プログラムを作っていくことと思いますが、パブリックスペース活用ガイドラインの作成やWell-Moving Networkの組成を想定される中で、公共的空間の活用は本当に部分的な手法というか、一部だと思っております。 それ以外の、例えば交通局の取り組みや、アルカサルをどのように活用していくのかなど、何か具体的に見えている施策があれば御紹介いただきたいと思います。

阿部 推進担当係員	交通部門の方で申し上げますと、今年度はパーソントリップ調査を実施しておりますので、来年度以降はそのデータを用いて道央圏の交通状況を分析していき、これからの交通体系の在り方について検討する場面が出てくると考えております。 この検討にあたり、庁内横断的に連携をしながら考えなければならないという部分が一つの要素としてあるのではないかというところで、交通部局をこちらに記載しているところです。
大藪委員	その他の部局ではどのような施策が考えられるでしょうか。というのも、やはりウォーカブルという横断的な目的の下、各部局が自分のところでは何ができるのか、徹底的に考え連携しながら繋がっていくことで、相乗効果が生まれると思います。 そこを令和８年度に考えますということだと思いますが、何かお考えがあればお聞きかせください。
阿部 推進担当係員	ありがとうございます。 例として、現在国交省では、道路空間の脱炭素化の計画を各自治体で作っていくという動きがございます。 そういった動きはもちろん札幌市にも届いておりますので、国の動きにどのように向き合い検討していくか、関連する部門と我々とですでに対話を始めております。 このように、５つの重点方針に紐づく各部局との連携が他にも生まれてきている状況でございます。
大藪委員	このWell-Movingというコンセプトやビジョンが、関係部局の計画よりも上位にあたると考えてよろしいでしょうか。
阿部 推進担当係員	こちらについては、それぞれ市役所の中でどのように音頭を取っていくかという整理が必要になる部分でもあるため、進め方としてWell-Movingをあえて上位に持っていくことに対しても議論があろうかと思っております。 ただ、Well-Movingの観点からの大きな庁内連携の座組はすでに整えているものがありますので、そこをうまく活用しながらどのように各局連携してやっていくかというところを、まさに今対話を進めているような状況でございます。
山崎委員	改めて御説明ありがとうございます。推進プログラムですが、令和８年と令和９年を重ね、行政として何ができるか、主体、プレイヤーとして何ができるかという部分と活動者をどう支援するかという部分を並行して整理されていくものと理解しました。 活動者の支援については、ガイドラインや活動者間のネットワークがかなり有効に効いてくるのではないかという林委員の見

	立てが非常に良くわかりましたし、これからもガイドラインとWell-Moving Networkで地域を盛り上げていくという狙いがあるものと推察します。 　ただ、泉山委員がチャットに記載しているように、そのプレイヤーたちを支援していく追加の仕組みのようなものを、どのように推進プログラムの中に位置づけられるかという点について、追加で検討できるといいのではと考えております。もし今の段階でその点についてお考えがありましたら、後ほどお伺いしたいと思います。 　また活動者の支援に加え、行政がプレイヤー化してテーマを設定していく手法がフェーズの始めにあると思います。とても難しいことですが、都心まちづくりのようにテーマで割るのではなく、エリアで割るような仕組みが横のつながりを作り、取組みを加速させる部分があるのではないかと考えております。 　板橋区では、高島平エリアの住宅団地のところにまちづくりを中心的に進める行政の部署を設置しており、彼らのおかげで高島平のまちづくりが非常に盛り上がっております。これは新しい部署を作る話でもあるため、極めて困難とは思いますが、例えばもみじ台のような、人口が減りつつある一方で 2万人以上住んでいるようなエリアをターゲットにしながら、行政として何ができるかを各課で考える横断的なプラットフォームが一つあると、より行政がプレイヤーとなれるイメージがつきやすいのかもしれないと思いました。 　繰り返しになりますが、この話は難しいことがいろいろとありますので、令和９年以降にもし余地があれば、検討いただきたいと思います。少し長くなって申し訳ありませんが、活動者の支援についてと行政のプレイヤー化について、現時点で何かお考えがあればお聞かせください。
石井 政策推進担当課長	まず１点目の活動自体の支援策になりますが、今回の推進プログラムを令和８年度に策定しつつ、別途、令和９年度に札幌市全体の次期中期実施計画を策定するタイミングがございますので、そこを見据えながら併せて推進プログラムを更新していくという柔軟性を持って取り組んでいければと考えております。先ほど話題となったシンポジウムなどを通じ、エリアマネジメント団体等からいただく御意見も含めながら、推進プログラムにおける新たな支援策等の施策を検討していきたいと思います。 　次に２点目の行政のプレイヤー化というお話について、ここに係る現段階の具体的な動きを示し、すぐに行うのは難しい部分が

	ある内情ですが、市役所の中においてもプレイヤーとして動ける人材を育成し、まちづくりに関わる機会を増やす道筋を描ければと考えております。
山崎委員	ありがとうございます。もちろん難しさを承知の上で申し上げました。 推進プログラムを行政計画として行うのか事業を組み込んで行うのかという点で、事業や支援制度のような枠組みをこの２年間で構築するということを前提に進めていく。計画を作るよりも、そちらに比重を置いていくという検討の仕方もあるのだろうなと考えた次第です。
有村委員長	ありがとうございます。 泉山先生がお戻りのようですが、ここまでの事務局から説明について、何かコメント、御意見等ございますか。
泉山委員	一部チャットで記載した部分もありますが、先ほどの説明を踏まえると、この推進プログラムはビジョンの施策集であるものと推察しております。 国交省や千代田区もそうですが、計画を作って終わるパターンがほとんどですので、札幌市ではそうならないよう今議論されていたような、市民や地域の活動をどのように応援するかという部分を検討の上、手厚く取り組んでいただきたいと思います。 またジャストアイディアになりますが、ニューヨーク市ではプラザプログラムという有名な取組みがあり、まずプライオリティマップでオープンスペースが少ないエリアを整理した上で、その中からさらにオープンスペースを整備したい地域団体を公募し、社会実験を通して実績を上げたところを対象にハード整備を行っております。都心部や郊外など、いろいろな立地特性もあると思いますが、ウォーカビリティが高いのか低いのかといった統計的なデータも含めた調査を行い、重点的な整備が必要なエリアを把握した上で、にぎわい作りの熱量が高い地域の住民や地域団体をきちんとボトムアップで支援する仕組みがあると良いのではと思います。 また、国の政策トレンドとして都市再生推進法人をどんどん構築していこうという動きがあります。札幌市では既に推進法人の第1号が存在しておりますが、次の段階としてあちこちで推進法人が生まれることが推測されますので、郊外部においても空間形成の主体としてハブを作ることができるような、パブリックスペースの活用やアイレベルでのウォーカブルを高める取組みを市

	も支援しやすくするようなプログラムの形成を期待しております。 　なぜこれが計画ではなくプログラムという言葉になっているのかという点にも期待感があるので、ぜひそのような進め方で取り組んでいただけるといいと思います。 　先に事例として挙げた千代田区では、補助金を配って終わりという手法ですので、そうならないように私もぜひ一緒に仕組みを考えていきたいと思います。
阿部 推進担当係委員	ありがとうございます。 　これまで時間をかけてビジョンを作ってまいりましたので、また時間をかけて計画を作ることに注力するよりは、おっしゃるとおり具体的に取り組むべき施策を記載していき、実行に移していくことに集中してまいりたいと考えております。 　市役所の中でも迅速性と実行性というところを非常に重視しており、実は政策調整部門からもどんどんトライをしていくべきだという指摘がございましたので、そういった点を意識して今回いただいた御意見も踏まえながら、新年度の実行へと早期に移せるように図っていきたいと思います。
三谷委員	先ほど山崎委員から庁内の組織について御意見がありましたが、参考として私が今居る福山市の事例では、公園の利活用を地域で進めていくことに取り組んでおりまして、公園所管の部署に利活用担当という専門のグループを設けて積極的に推進していく体制作りを進めております。 　やはり公園や道路など一般的な維持管理のみを行ってきた背景を踏まえると、行政内の文化として利活用にあまり積極的になれない部分があるかもしれませんが、あえて利活用を推進していく部署を置くことも推進体制の一つの考え方ではないかと考えておりますので、御検討いただければと思います。
須志田 政策推進担当部長	道路空間の再配分といった取組みや、パブリックスペースの価値をエンドユーザーである市民の皆様に享受いただきながら地域に対する理解を深めていただくという取組みは、全国的に大きなトレンドと考えておりまして、先ほど御紹介いただいた福山市以外にもそういった動きがあるものと理解しております。 　このような時流を踏まえ、パブリックスペースを市民の皆様にもっと身近に感じていただくことは、とても大切なことであると考えておりまして、このビジョンにおいてもそれは盛り込んできたつもりでございます。

	一方で、パブリックスペースの管理者をどのように巻き込んでいき、他都市に見られるような利活用の促進を専門で行う組織をいかにして設けていくか。これについては直ちに行うことは難しい部分ですが、非常に重要になってきていると認識しておりますので、選択肢の一つとして今後検討してまいりたいと考えております。
有村委員長	ありがとうございます。予定の時間に近づいてまいりましたが、何か最後に御意見はございますか。よろしいでしょうか。 それでは、本委員会については今回の検討委員会が最終回になります。ここまで検討したビジョンの実現に向けた提言として、最後に委員の皆様から総括コメントをいただきたいと思います。林委員が退席されておりますので、順番に泉山委員、大藪委員、三谷委員、道尾委員、山崎委員の順番でコメントをいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします
泉山委員	皆様ありがとうございました。 現在、全国的にウォーカブルの取り組みが社会実験やイベント化に留まりがちな傾向を感じております。計画や政策を打ち出し、着実に実行していくお手本となる事例が少ないと認識しておりますので、札幌市の取組みには大いに期待しています。 先程も申し上げましたが、やはり計画で終わる事例が多いため、エリアマネジメントやハード面など、具体的な行動を伴う事例を積極的に創出していただきたいと思います。 また、先のコメントで触れましたが、ヨーロッパやアメリカの都市構造と札幌市の都市構造には近似性があり、特に駅に依存しないエリアも存在する点が共通していると考えております。海外の事例を多数参照されていると思いますが、導入のしやすさといった点からもその知見を生かしながら、全国の各都市にとって参考となり、市の誇りとなるような事例が私の故郷である札幌で生まれると大変嬉しく思います。 引き続き、皆様と共に考えていきたいと思いますので、ぜひよろしくお願いいたします。
大藪委員	皆様おつかれさまでした。 泉山委員のお話にも関連しますが、ウォーカブルという概念が自治体の都市計画における上位戦略として定着し続けることは、極めて重要であると考えております。 パブリックスペースの利活用がイベント的又は社会実験的に終焉を迎えがちですが、これは結局のところ、その位置付けが担当

	部局のみに留まってしまい、ほとんどのケースで他部局の理解を得られていないことに起因しておりますので、実践する上で非常に残念に感じているところです。ウォーカブルという旗印のもと、関係する各部署が、その実現のために自己の手持ちのリソースと実行可能な事柄を徹底的に追求していくことが大事です。 　その点、今回のウォーカブルビジョンは、策定に2年間を要し、現場での実証実験や、産学官民の多様な連携を通じて構築されたものであり、非常に丁寧に作成された分、相応の強度を持つものに仕上がったと考えております。 　今後は、これをどのように運用していくかが主題となりますが、この２年間のプロセスが今後の本ビジョンの普及やパブリックスペースの活用に生きてくると考えておりますので、引き続き、札幌市の御尽力に期待しております。ありがとうございました。
三谷委員	皆様ありがとうございました。 　先ほど大藪委員のお話にありましたとおり、プロセスを重ねて丁寧にビジョンを作成されている思いますし、来年以降もこの先の具体的なアクションについて御検討いただけるとのことですので、そこでさらに広く議論を重ね、アクションの具体化を進めていただきたいと考えております。 　推進体制や仕組みづくりについても議論の中心となりましたが、最終的には、市民の方々や来訪者が札幌の街を歩くという行為を通じて、四季折々の札幌で「Well-Moving」、すなわち心が動く小さな感動をどれだけ日常の中で生み出せるかという点が極めて重要になってくると思います。 　また、地方においては、公共交通機関や車の選択肢がある中で、歩行という行為そのものが少なくなりがちです。歩く時間をどのように豊かに過ごせるかという部分について、体験を通じて考える機会が市民には不足しておりますので、市民の方々と共に考える時間、体験を共有する機会を設けることも非常に重要であると考えております。 　引き続き期待をしております。ありがとうございました。
道尾委員	ありがとうございます。全体の感想に加え、追加の意見をチャットにて送付いたしました。後ほど事務局の皆様にご覧いただければ幸いです。 　まとめの点について、今回、2045年を見据えたビジョン策定の議論に、札幌を愛する市民の一人として参加できたことを大変嬉しく思っております。このビジョンをワクワクしながら具体的な

	行動へと繋げ、活かしていくために、どのような担い手が必要か、また、私の所属する大学といった拠点が、地域住民の声を行政との間だけでなく、先述の産官学連携の一員として、いかに活用できるかという、当事者としての視点についても深く考えさせられた時間でした。 　現在、パンフレットやガイドライン等の策定が進められているところですが、197万人を擁する大都市札幌には、多様な主体が存在します。エリア設定についても、その規模の適正化に向けた議論が進むことと存じます。このような状況において、行政をはじめ先に挙がったWell-Moving Networkのような主体が対話の場を設け、誰一人取り残さないという理念の下、市民一人ひとりの札幌市で過ごしたいという声を、いかにポジティブな形へと転換できるかが重要であると考えております。 　これは、市民一人ひとりに委ねられる地域自治の領域でもありますが、このビジョンが訴えかける力もまた大きいと思います。市民の今後の受け止め方について、大いに期待を寄せております。 　また何においても行政や区の地域振興課が、一元化の難しさに苦労されていることは承知しておりますが、いがみ合って暮らしたいと願う市民は居ないと思います。このビジョンがそうした現状を改善し、円滑な協力体制を築くための一助となることを願っております。
山崎委員	２年間にわたり、ありがとうございました。いつも大変丁寧に資料をまとめていただき、また分かりやすく御説明いただいたおかげで、円滑かつ楽しい時間を過ごすことができました。 　Well-Moving」というキーワード自体も、事務局の方々から提案いただいたものと認識しておりますが、このようなキャッチフレーズを含め、市としてどのような発信をし、どのような状態を目指していきたいかということを思い描けているのは、まず素晴らしいことと思います。 　一方で、Well-Movingという言葉が、具体的にどのようなシーンで実現され、市民の方々がどのような感情を抱いたときに「Well-Movingなまち札幌」と感じられるのかについては、解釈の幅があって良いとは思いつつも、何か共通するイメージや目指すべき状態を共有する必要があると思います。それができれば、パブリックスペースの活用が単なる手段ではなく、目的を持った活動になり得ると考えておりますので、そこを目指して取り組んでいただければと思います。

	私個人としては、第２回か第３回の委員会で、林委員に窮地に追い込まれた際に苦し紛れに申し上げたオヒサシビリティという言葉が、非常に印象に残っております。 その後、私自身、東京ではありますが、就労者向けのアンケート調査を行う際に、久しぶりに話す頻度といった項目を設けてみました。その結果、様々な影響を考慮しても、パブリックスペースを利用していなかった人に比べ、利用していた人の方が3.5倍もオヒサシビリティが高かったというデータが得られました。現在、これを論文としてまとめるべく取り組んでいるところですが、このオヒサシビリティは、公共空間で人と人がどのように活動し、出会えるかという点に大きく寄与するという意味で、パブリックスペースの活用はやはり重要であると改めて認識しております。 もちろん、オヒサシビリティはWell-Movingな状態の一つの側面に過ぎないと思いますが、多くの市民が、Well-Movingというキーワードを通じて、札幌がこうあってほしいという状態を思い描き、感じ取ることができればいいなと考えております。
有村委員長	ありがとうございました。これで皆様、一言ずつお話しいただけたかと思います。私も座長として、一言だけ総括のコメントをさせていただきます。 ２年間にわたり、皆様、大変おつかれさまでした。また、事務局の皆様も、最後にこのような形でビジョンをまとめ上げていただきましたが、本日もまだ課題があったかと思いますので、ぜひ御対応いただければと思います。 私自身、札幌を対象都市の一つとしながら研究を進めておりますが、強く感じるのは、2000年を超えてから、人口増加が頭打ちになっていく中で、移動に困難を抱える方々、運転免許を返納する人々の増加や、人口減少という状況に直面していることです。このような状況下において、都市における生活の時間と空間の中で、いかに多様な価値、あるいは先ほどお話にあった小さな感動といったものを、埋め込んでいけるのかが重要であると考えます。 そのためには、自動車から少し速度を落とし、人間の五感を最大限に発揮できるようなまちづくりを推進することで、札幌はアジア、さらには世界の中で輝く都市へとなっていくのではないでしょうか。 こういった意義や価値を充実させる方向に、今回ビジョンを策定してきたと思いますが、パーソントリップの話でもございまし

	たように、確かにマクロな計画は作成できるものの、推進プログラムを含め、魂を込めて実行していくべき部分はこういった取組みになってくるものと考えております。 　札幌市におかれましては、各縦割りの部署を横断的に連携させ、札幌をさらに良い都市にしていただきたいと願っております。 　２年間にわたり、本当にありがとうございました。以上でございます。 　最後に私自身が司会とコメントを務める形となりましたが、皆様から頂戴いたしました総括コメントは、すべてビジョンに対応する形で取りまとめを行いますので、よろしくお願い申し上げます。 　それでは、以上をもちまして私の進行を終えさせていただき、以降の進行を事務局にお返ししたいと思います。よろしくお願いいたします。
石井 政策推進担当課長	有村委員長、本日の議事進行、誠にありがとうございました。事務局といたしましては、Well-Moving City 2045 ビジョンの実現に向け、本日いただいた御意見を踏まえながら取り組んでまいりたいと考えております。 　また、冒頭で説明いたしましたとおり、本検討委員会は本日の開催をもちまして最終回となります。委員の皆さんにおかれましては、大変御多忙のところ各委員会に御参加いただきまして、誠にありがとうございました。 　有村委員長におかれましては、委員会の滞りない御進行や御議論の集約に御尽力いただきまして、改めて感謝申し上げます。 　それでは最後に事務局を代表して、須志田より閉会の御挨拶を申し上げます。
須志田 政策推進担当部長	事務局を代表しまして、御挨拶申し上げます。 　本日は最後まで熱心に御議論いただきまして、本当にありがとうございました。 　また、委員の皆様におかれましては２年間という長期間にわたり、本ビジョンの策定に向けて多大なる御尽力を賜りましたことを、改めて深く感謝申し上げます。 　本日の議論では、ビジョンの成案化に向けた最終確認に加えまして、実行フェーズの核となる推進プログラムや推進体制。そして仮称ではございますが、パブリックスペースの活用ガイドラインについても、実効性を高めるための貴重な御示唆を多数頂戴したものと考えております。

	本日の議論を通じまして、ビジョンの実現にはハード面の整備だけではなく、産学官民が連携する場の構築や地域の方々が主体的に関われる環境づくりが不可欠であることを改めて強く認識したところでございます。 全５回の本委員会は今回をもちまして終了となりますが、策定後も委員の皆様からいただいた御助言をしっかりと受け止めまして、先ほども言葉として出てまいりました市民の皆様、そして来訪者の皆様の心が動く街、小さな感動を様々な場所で見つけられ、五感をフルに刺激するようなまち。すなわちこれをWell-Moving City SAPPOROと申し上げておりますが、これの具現化に向けて、市民の皆様、企業の皆様、そしてしっかり我々行政が連携しながら取り組んでまいりたいと考えております。 結びとなりますが、これまで皆様の多大なる御尽力に改めて深く感謝を申し上げますとともに、皆様のさらなる御活躍御健勝をお祈りしまして、私の閉会の挨拶とさせていただきます。 本日はありがとうございました。
石井 政策推進担当課長	オンラインで視聴されている皆様におかれましては、最後まで御視聴いただき誠にありがとうございました。 これまでの札幌市の取り組みにつきましては、札幌市公式ホームページ「ウォーカブルシティの推進」に掲載しております。本日の資料につきましても、後日ホームページに掲載予定です。それでは、以上をもちまして、本検討委員会を終了させていただきます。関係の皆様、誠にありがとうございました。